

意識の志向性より存在の矛盾性へ (二)

高 階 順 治

一 意識の志向性より人間の關心性へ

一

フツセールの意味する純粹意識が、意識の一般的特性としてブレンターノによつて明かにせられた志向性を、その特性として有つことは今更いふまでもない。その志向性がフツセールに於て如何なる意味を有ち、またそれが彼の現象學に於て如何ほど重要な使命を負はされてゐるかといふことも、今や周知の事柄としてこれが詳述を省いて置かう。そして今は只、その志向性が一般認識論に於て最も重要視せられる主觀對客觀の問題と如何なる關係に於て存するかを見ることより進んで、それがハイデッガーの人間の關心性と如何に關係し來るべきか明かにすることに、先づ主として考察の範圍を限定しよう。

ブレンターノが意識の志向性を解して、對象の志向的内在 (Die intentionale Inexistenz eines Gegenstandes) となし、それを以て各意識が自らの中に或もの (etwas) を客觀として包有することであると化したことは有名であ

(1) これと同じ意義をフツセールは或ものについての意識たること (Bewusstsein von etwas zu sein) なる言葉で

現はし、これを以て體驗の一般的特性なりとする。かうした叙述に於ても明かなる如くそれは當然意識が etwas に向つてゐること (Gerichtesein-auf-etwas) であり、隨つてそこには必ず向つてゐるものと向はれてゐるものとの

對立がなければならぬ。その向つてゐるものが純粹自我 (eines Ich) であり、向はれてゐるものが etwas である。故

に純粹自我を主觀的作用面とすればこれに對する或ものが客觀的對象面となる。かくて志向性は當然主觀が志向的客觀に向つてゐることである。(3)

けられた二側面を區別し得ることも明かである。然らばこの向つてゐる (richten) とか位置づけられる (orientierte) (4)

といふことは一體何を意味してゐるであらうか。フツセールはこれを注意してゐることゝか、或は精神の眼を向けてゐることゝかの言葉で現はしてゐる。(5) かくて志向性とは主觀が客觀を目指してゐることゝ解される。然らばフツセールに於てこの主觀が客觀を目指すといふことは果して如何なる意義を有つであらうか。

今現象學的立場を自然的立場や論理的立場から區別して考へる時、フツセールに於ける主觀對客觀が、自然的立場や論理的立場のそれと、全く異なる意義を有してゐることはいふまでもない。自然的立場に於て考へられる主觀は、常に時空因果の範疇内に事實的存在として實在する自我であり、普通の心理學が採つて以てその研究對象とするところの精神作用である。またその客觀はかゝる精神作用からは全く超越的に、それ自ら獨立に existent に實在する——と獨斷せられた——事實關係内の外的世界である。そしてそれら兩者の關係もやはり例へば寫し

寫されるものゝ間の關係の如く全く事實的である。かくて自然的立場に於ける主客關係の成立のためには、各々獨立した三つの存在がその構成要素として豫定されねばならず、而もそれらはすべて時空因果の範疇内に實在するものでなければならぬ。勿論その場合例へば幻覺などの場合の如く、對象としての外的事物が事實存在しないこともあるであらう。けれどもかゝる場合と雖も對象はやはり事實關係内に存在する幻覺作用に對應して實在するもの即ち幻覺されたものとして存在するのである。普通常識的見解は固より、科學的見地に於てもかゝる主客關係を以て最も明瞭不可疑のものとする。けれどもフツセルに於てはかゝる事實關係内のすべての客觀は只陰影づけ (Abschattung) の關係に於て知覺せられるものに過ぎず、その最も明瞭に知覺せられる場合と雖もそれは結局外的知覺たるを免れず、そして外的知覺たる限りその陰影によつて飽滿せしめられ、そのためにその陰影の因つて生ずる根源を求めるに由なきものたるのみである。随つてかくの如き主觀客觀及びその間の關係が、すべてを内面的意識的に觀ぜんとする現象學的立場からは去外せられ、その領域から全く排除せらるべきものたることはいふまでもない。現象學獨特の還元的方法是實にかゝるものゝ排除のために主として存するものである。(7)

次に論理的立場の見解は、主客の關係を全く形式的に規定する。この場合主觀も客觀も共に自然的立場に於ける如く時空因果の事實的關係内に存在する必要がある。主觀は例へばカントの意味する意識一般の如き超經驗的普遍者たることができ、それに對立する客觀も時空因果を超越せる普遍者たることができる。この主客の對立は現にその如く存在してゐるものではなくして、論理的にその如く存在せねばならぬとされるものである。例へば

右なる概念は左なる概念を豫想し、上は必ず下を豫定せねばならぬ如く、主観は必ず客観を、客観は必ず主観を豫想せねばならぬとする。即ちすべての相對概念に於て然る如く、主観客観は互に他を必要とし、一は他を必須的のものとして豫定する關係にある。⁽⁸⁾ 随つて主観には客観が、また客観には主観が、論理的必然性を以て依屬してゐなければならぬ。それが事實に於て在るか無いかの事實問題 (quid facti) ではない、必ず在るとせられねばならぬ要請の問題であり、また在るとなし得る權利問題 (quid iuris) である。かくて論理的立場に於ては意識作用は必ず意識内容を必要として要求し、主客の對立は互に要請せられることによつて生ぜしめられた意識主観と意識客観との對立となり、その間の關係も全く形式的論理的に規定さるべきものとなる。意識主観は一般には表象し認識すると共に意志し情感するものと考へられるのが常である。然るに論理的立場に於て問題となる意識は、⁽¹⁰⁾ 其の具體的多面的意識ではなくして、例へばリツケルトの規範意識に於ける如く、ひたすらに認識し判斷し、それに據つて眞理を構成すると考へられた意識——彼の所謂第三の主客對立に於ける超個人的認識論的主観としての意識のみである。情感し意志する意識は非論理的なるものとしてその立場から拒外せられるのである。かくの如く主観は全く形式的論理的のものなるが故に、それに對立せねばならぬ客観も單に思惟せられたものであり、判斷に據つて指定せられたもの、即ち概念的存在である。價值の世界といひ妥當の世界といふも、結局それは論理的思惟によつて案出し出された世界たるを免れない。随つてそれは內在的意識には直接基礎を有つことなき概念的構成の超越體に外ならぬ。それ故たとひそれが論理的必然性を有ち、また認識論的基礎づけを有つものとはい

へ、決して明證性を有つて我々の直觀に現前し來るものとはいひ得ない。その限りに於て論理的立場に於ける客觀は、例へばリツケルトなどの考へる價値の世界の如く、たとひそれが如何にカントの批判哲學の洗練を経て獨斷の假睡から蟬脱してゐるものと自負するとしても、主觀を超脱せる獨自的抽象的存在の世界たる點に於て、カント以前の形而上學者の考へた超越的本體の世界と五十歩百歩のものたるを免れぬ。隨つて一般にかゝる形式的論理の見解はこれを形式的本體論の立場のものと概言し得られるであらう。さうしてかゝる立場がまたその形式的なることの故にフツセルに於て峻嚴なる現象學的還元の裁きを受けなければならなかつたことはいふまでもない。⁽¹¹⁾何となれば現象學はたとひ一種の本體論ではあるとしても、それは形式的本體論ではなく實質的本體論だからである。即ち現象學は明かに實質的本質學に屬するものである。⁽¹²⁾

二

然らばその現象學的立場に於て主客の關係は最も明瞭には如何なる形態をとつて現れてゐるであらうか。それはいふまでもなく純粹意識或は純粹體驗の本質たる志向性そのものゝ姿に於てである。そして志向性とは結局 *Noesis* と *Noema* との關係であり、純粹意識の本質はノエシス的ノエマ的構造(*Noetische* = *Noematische* = *Struktur*)⁽¹³⁾なる性格によつて現され得ることが明かであるが故に、人はこのノエシスとノエマとの關係の中に主觀客觀の關係を最も明かに見得るであらう。かくて志向性とは實は主客關係の最も如實なる具現とも見られ得るのである。

かくノエシスのノエマ的構造が純粹意識或は純粹體驗の本質であり、さうしてこの本質を諦観して分析し記述することが現象學の主要任務であることを察するならば、フツセルの現象學にとつても他のすべての認識論にとつてと同様に、主客相互の關係が如何に重要な意義を帯びて現前し來るかゞ肯かれるのである。

志向性はブレンターノに於ける對象の内在性であり、尙明瞭には内容に對する關係即ち客觀へ向つてゐること (die Beziehung auf einen Inhalt; die Richtung auf ein Objekt) と言表せられ客觀としての或ものへの關係 (die Beziehung auf etwas als Objekt) と呼ばれるものである。これをフツセルの言葉によつて現すならば von etwas の意識關係であり、その關係は「に向けられてゐる」即ち「に轉向されてゐる」 (das Gerichtetsein auf; das Zugewendetsein zu) によつて現はされ、⁽¹⁶⁾ 志向するとは自ら相關的對象に拂はること (Sich = mit = dem = Korrelatgegenstand = zu = schaffen = machen) またはそれにまで向けられてゐる (Zu = ihm = hin = gerichtet = sein) などである。⁽¹⁷⁾ かくしてゐる關係は嚴密にはノエシスとノエマとの間にのみ存するのである。さて然らばこの von とか auf とか zu とかによつて現はされてゐる關係は一體如何なるものであらうか。それは勿論自然的立場の實在的 (real) 關係でもなく論理的立場の形式的 (formal) 關係でもない。かゝる時空因果的事實關係内のものや單なる概念的構成の世界は現象學的立場では既に排除されてある筈である。然らば現象學的殘基としてのノエシス・ノエマ的關係は如何なるものか。それが即ち本質關係 (Wesensbeziehung) 或は形相的 (eidisch) ⁽¹⁸⁾ 關係と呼ばれるべきものである。こゝに於て我々はノエシスとノエマとの間の本質的關係に於て主觀と客觀とが如何なる様態を持して存してゐるかを見

意識の志向性より存在の矛盾性へ

なければならぬ。今この問題に於て私の導出したい——せねばならぬと思ふ——結論を豫め表明するならばそれは、フツセールが意識の志向性を以てその現象學の基調となしてゐる限り必然的に主觀を主とし客觀を従とする謂はゞ主觀主義的立場に於て存してゐるといふことである。併しながらこゝにいふ主觀主義的立場とは勿論それ故に客觀を輕視することを敢てする立場といふのではない。否むしろ反對に、主觀に即してそれに於て存するが故に却つてフツセールの現象學は客觀的なもの即ちノエマ的なものゝ分析記述に多く自らの仕事を見出さねばならなかつたではないかといふことである。

さてフツセールの現象學的領域たる純粹意識のノエシス・ノエマ的構造とは何を意味してゐるか。先づ純粹意識の意味を考へるに、それがデカルトの我思ふ(cogito)やまたは一般に意識すること(cogitare)によつて代表せしめられてゐるとしても、意識されたもの(cogitatum)によつては代表されることがないといふことは、それが作用であつて對象とか内容ではないことを示してゐるやうに思はれる。事實、現象學的還元によつて拒外せられねばならぬものは自然的立場の事實的超越者であり、論理的立場の概念的超越者であつた。然るに超越者は何かに對する超越的存在であり、その限りに於てそれは作用を超越した對象、主觀を絶した客觀、即ち自然科学的事實の世界や認識論的妥當の世界であると考へられる。随つてこれらを排除した後に現象學的殘基として取り出された純粹意識の中には、以上の立場に於て意識作用または認識作用としての働きを有つてゐた或る主觀的なものが、何等かの形で保存せられてゐ、それが純粹意識の構成要素をなしてゐるものゝ如くに思はれる。随つて現

現象學的還元に於ける全き排除は主として意識の對象的方面にのみ行はれ、その作用的方面の大部分はたとひ變容は受けたであらうとしてもやはり純粹意識構成の基體としてその裡に保存されてゐるものと解することができ。現象學がカントの先驗的心理學の發展であると解釋され得る所以のものも恐らくこの點に存するであらう。こゝに於て純粹意識は完全に作用のみの世界と解せられ、純粹自我は志向作用そのものゝ自由に遂行され得る領域と見られるであらう。然りとすればその限りそこには主觀的なものゝみが存して客觀的なものは存しないやうにも思はれる。何となれば作用そのものは客觀化する働きではあつても客觀化され得るものではないと考へられるからである。併しながらもし以上の如しとすれば、純粹意識には作用的側面としてのノエシスのみが存在し、對象的側面としてのノエマは存在し得ないやうに思はれる。けれどもノエシス・ノエマ的構造をその本質とする純粹意識にとつてかゝる事態の在り得ぬことはいふまでもない。然らばこの作用のみより成ると考へられる純粹意識に如何にして對象的なノエマが必然的のものとして現出し來るであらうか。

現象學的還元は事實に於て自然的立場と論理的立場のすべての對象的なものを排除した。けれどもそれはかゝる自然的形式的超越者の拒外であつても決して純粹意識の成素としての内在的對象の拒外ではなかつた。このことは内在的對象がプレンターノによつて指示された志向性そのものであり、その志向性が純粹意識の本質であることを想起することのみによつても直ちに了得し得られる事柄であらう。純粹意識は如何に現象學的還元によつて淨化せられたものであるとはいへ、否その還元を経たるが故にこそ、自然的・論理的對象即ち事實的形式的

超越者への誘惑に陥ることなしに、ひたすら内在的な von etwas の意識として、また内在的な或ものに向へる自我として、即ち眞の意味の志向的體驗として、必然的絶對的存在性をかち得ることができるのである。事實的・形式的なるものについてはすべての世界は固より、文化も國家も神すらも排除せねばならなかつた現象學的還元も、實質的存在論としての現象學的領域内のもはそれによつて一毫も失ひ去ることなく、却つてその全體的絶對的存在の獲得を完了するものであつた。随つて内在的本質的對象としてのノエマはそれによつて一層明かにせられることはあるとしても決して除去せられることはなかつた。即ち現象學的還元の後にもノエシスに對するものとしての客觀的存在は依然として存在してゐた。かくて純粹意識そのものゝ中にたとひ内在的本質的意味に於てゐるとはいへ、やはり主觀・客觀の對立が包藏され得たのである。それはノエマが内在的客觀であり、ノエシスが内在的主觀であるが故に、ノエシス・ノエマの關聯は直ちに内在的主客關係と見られ得るからである。然らばその内在的對象としてのノエマは超越的對象としての外界や妥當的價值の世界と如何に異なるであらうか。超越的といひ内在的といふもこれらは本來全く別異のものではなく、同一のものが時空因果の範疇に入れられた時または超主觀的概念的構成と看做された時超越的となり、これを意識に即するものとして即ち意識の一樣相として眺める時内在的となるのではなからうか。もし然りとするならば現象學は主觀は固より一切の客觀もこれをすべて意識に即するものとして眺めゆく立場のものと見ることができよう。即ちその内在的とは意識的といふことになるであらう。けれども併し現象學的領域に於ける主客關係が單に意識的といふ名のみでその特徴を保持せんと

するならば、それはリツケルトが主客對立の第三のものとして擧げたそれと別に變りがないではなからうか。何故ならばそこでもやはり客觀は自己の意識内容であり、それに對する主觀はたとひ超個人的であつたとはいへやはりその内容を意識するものであつたからである。即ち主客共に意識的といふ點ではフツセルに於ける主客關係とリツケルトに於けるそれとは何等差異なきものゝやうに思はれる。けれども事實に於て兩者の間に根本的區別のあるのは何によつてあるか。

リツケルトの立場は論理的であるが故にその意識、否、認識主觀と認識對象との關係はどこまでも形式的たるを免れなかつた。これに反してフツセルの立場に於てノエシスとノエマの關係は本質的相關關係であつた。志向性とは實にこれらの間の相關(Korrelation)の關係に外ならなかつた。即ちノエマは内在的客觀であり、フツセルに於ける主客關係は内在的相關關係であつてそれ以外ではない。然らばノエシスに相關するものとしてのノエマは如何なるものか。それはいふまでもなく内在的客觀である。けれどもフツセルに於てこの内在的客觀は二つに分たれる。即ちそれは志向的客觀(intentionales Objekt)と把握された客觀(erfasstes Objekt)とである。⁽²⁰⁾ノエシスに相關するものとしてのノエマはこれらの中の志向的客觀であつて、把握せられた客觀ではない。把握せられた客觀はこのノエマによつて更に志向せられるところの、謂はゞ二重の志向によつて只單に指定せられたるノエマの核である。隨つてそれはノエマそのものではない。ノエマをその周圍に群集せしめつゝすべてのノエマにその方位を指示するところの中心の核である。この核が更に統一點をなしてノエシスを超越するに至る時

意識の志向性より存在の矛盾性へ

これを對象 (Gegenstand) と呼ぶ。この對象は客觀であり、自同者であり、可能的賓辭の規定せらるべき主辭であり、またすべての賓辭から抽象せられたところの純粹なる或もの (pure X) である。⁽²¹⁾ 各々のノエマは皆その内容即ち意味 (Sinn) を所有し、それらを通じてその對象に關係するのである。⁽²²⁾ かくの如くノエマはノエシスに對して一つの對象性ではあるが、それはその規定の仕方にかける對象 (der Gegenstand im Wie seiner Bestimmtheit) であつて、ノエマ的對象そのもの (der noematische Gegenstand schlechthin) ではない。⁽²³⁾ 對象そのものはむしろノエシスを超越してしまつてゐる空虚なる或もの (leeres X) である。これが把握せられた客觀であり、ノエシスによつて志向はされるとしても直接それに相關するものではない。直接ノエシスに相關するものは決してかゝる空虚なる超越的對象ではなく、内在的な志向的對象であり、意味即ち内容を所有する客觀である。この客觀が意味即ち内容を所有するに至つたのも實はそのノエシスの意味づけの作用によつて意味づけられたからである。これによつてノエマは決して抽象的に空虚なる概念的存在ではなく、ノエシスに相關し、それによつて意味づけられるところの具體的存在たることが明かである。隨つてそれは單に意識内に形式的に指定せられたる客觀ではない。即ちリツケルトの意味してゐる如き形式的内在的客觀ではない。何故ならばリツケルトの考へる内在的客觀なるものはフツセールに於ける把握されたる客觀即ちノエマ的對象そのものに相當すると思はれるからである。志向的對象はノエシスによつてかくくゝと規定せられた對象であり、對象そのものよりも一層内在的主觀としてのノエシスに近く、またそれだけ多く具體性を帯びたる客觀である。かくて純粹意識にかける志向的關係内の主觀對

客観の關係は、リツケルトの第三の對立として擧げた意識の主客關係よりも、隨つてまた當然他の一切の立場に於けるそれよりも、遙かに増して具體的であり、根源的であるといへるのである。現象學に於て本質的相關關係を重要視する所以もこゝにあるであらう。

三

次に我々はこの相關關係に於ける主觀・客觀の關係そのものについて考へて見なければならぬ。これはまさしく相關關係であるが故に一が互に他に影響しまた他によつて影響される。フツセル自らの叙述にも明かである如く、ノエシスとノエマとの間には一つの平行 (Parallelität) 關係が存在し、兩者は相互にこれを他から分つこと能はず、ノエマの如何なる微妙の相異もそのまゝにノエシスに反映し、またノエマはノエシスによつて常に變容せしめられてゐることは、それが本來ノエシスの意味づけの作用によつて意味づけられるものなることに徴しても明かである。こゝに於て主觀と客觀とはその何れが重きをなすといふこともなく、共に平等に取扱はれ、何等不公平なくその存在の權利を保證せしめられてゐる如くに思はれる。併しそれにも拘はらず我々はこゝに、それが少くとも志向的關係に於て存してゐる以上、志向するものが志向されるものよりも力に於て強く地位に於て高き位置を占めてゐるといふことを、單にその言葉の感じの上からのみでなく、意識現象の具體的構造に照して理解されるではないかを思ふのである。さうしてこの點を特に明かにせんとするのが只今の我々の歩みに於ける

目的なのである。

さて然らばこのことは如何にしていひ得られるであらうか。それは先づノエシスが本來意味づける作用であり、ノエマが意味づけられた客體であることを知ることによつて明かにされるであらう。然らばその意味づけるとか意味づけられるとかいふことは何を意味してゐるか。その間の關係を見ることによつて我々はフツセールの立場は主觀尊重の立場であることの理を明かにしなければならぬ。

さてフツセールに於ても最も重大なる問題は機能的問題即ち意識對象性の構成の問題 (die funktionellen Problem, bzw. die der "Konstitution der Bewusstseinsgegenständlichkeiten") であつた。さうしてこの構成の機能は全く特異なる或ものであり、ノエゼ (Noese) の純粹本質内に基づけるものであつた。⁽²⁵⁾ 即ち彼に於て意識對象性は全くノエ

シス的なものによつて構成されるとなされたのである。こゝに我々は彼の主觀尊重の思想を見るのである。かくいふ時人は直ちにかの認識論に於ける構成説、即ち眞理は主觀によつて構成されるものと説くカント的考へ方を想起して、フツセールの立場を客觀よりも重んずるものであるとの我々の主張がカント的主觀主義と同じ意味に於てあるであらうことを豫想するでもあらう。けれどもこの豫想は當らない。何故ならばフツセールに於てノエシスが意識對象性の構成 (Konstitution) をなすといふことゝ、カント的構成説に於て認識主觀が眞理の構成 (Konstruktion) をなすといふことゝは其の意義を全く異にするからである。随つて我々がフツセールの立場を主觀主義的と解しても、これは決してコペルニクスの轉回の意味の主觀主義の意味に於てゐない。これを明か

にするために我々はノエシス的なもの、即ち主としてノエゼの對象構成の意味を究明しなければならぬ。

フツセールに據れば對象構成の問題は「例へば自然に關して、ノエゼが質料的なるものを生氣づけ、多樣的統一的連續及び綜合に織り合せつゝ、或ものゝ意識を成就し、それに於て對象の客觀的統一がすべてに等しく表はされ、示され、また理性的に規定され得るやうにする」ことであつた。⁽²⁶⁾かうしたフツセールの説明は一體何を意味

してゐるか。元來純粹意識が志向的體驗であり、志向するものはノエシスであるが、このノエシスが對象構成の機能を擔ふのである。その機能を明かにするために我々はノエシスそのものゝを分析なさねばならぬ。ノエシスは

現象學的に二つの要素に分たれる。一は實際に志向性を有ち、意味づけの作用をなすことによつて對象構成を成就するものであつて、これを志向的形式^{モルペー} (Intentionaler morphé) と名づける。これがノエシス本來の性質を擔ふ

もので、これをノエシスと區別するために特に *Noese* と呼ぶ。他の要素はノエシス内に在りながら而もかゝる志向性を有つことなく、隨つて直接には對象構成に參與することなきもので感覺的質料^{ヒール} (sensueller hyle) と呼ばれる。ノエシスはこの二つのものゝ統一である。⁽²⁷⁾ヒールは決してノエマを意味づけることがない。それは只暗

黒なる感覺の束または流れ (Bündel oder Ströme von Empfindungen) であつて、ノエシスの素材 (Stoff) たるものに過ぎぬ。これに反してノエゼはノエマを生氣づける作用 (beseelende Fkte) であり、廣義の理性⁽²⁸⁾ (nous) であ

る。故に志向性なる特徴を持し、志向的體驗もこの意味附與による統一として存在するのである。ヒールはノエゼの把握によつて精神を賦與せられ、生氣化せしめられる。この生氣化の働きによつて本來は志向性を有たぬと

思はれるヒーレーから具體的な志向的體驗が生ずるのである。かくノエシスは二つの成素より成り、而もこの二つは完全な結合をなして存し、形式なき素材も、また素材なき形式も考へることができない。それ故ノエシスにとつて何れを重要な成素となすことも出来ない。併しながらノエシスのノエシスたる所以の志向性を擔ふものが形式としてのノエゼであり、ヒーレーはノエゼの生氣化によつてのみ意味を有し得るものなることを思へば、ノエゼが、即ち主觀的なノエシスの中のまたその主觀的なものが、より重要な役目を有つことが肯かれ得るであらう。

次にノエシスとノエマとの間の關係を見るに、これらは常に平行關係に於て相關的に相對立してゐる。随つて本來地位上の差別はない。けれどもノエマはヒーレーを介してのノエシスの意味附與作用によつて生じたものである。ノエシスによつて意味づけられた Sinn がノエマである。随つて先づ意味づけられるものがあつて次に意味づける働きがあるのではなく、意味づけの作用がある故に意味づけられたものが生ずるのである。即ちノエマの存在はノエシスの存在によつて初めて可能でありまた確實である。赤い花そのものゝ超越的存在、即ち把握せられた赤い花そのものゝ存在は我々にとつて不明である。けれども意味づけられた限りの赤い花、即ち志向せられた赤い花の意味は、それを赤い花と意味づけるノエシスの働きが存在する以上、その存在の疑ひ得ないノエマである。即ち超越的存在としての對象 X は、ノエシスによつて志向はせられねばならぬとしても、その存在そのものについて見る時は、志向的作用の有無には無關係に、或は存在することもでき、また存在しないこともでき

るであらう。何故ならば超越的なものについてはその存在性を決定することができぬからである。けれども志向的對象としてのノエマは必ず志向的作用としてのノエシスに相關的に存在せねばならぬ。かくノエマがノエシスのノエシス的なもの、即ちノエゼの意味附與作用によつてもたらされた意味的存在なるを思ふ時、我々はノエシスがノエマに比して力に於てより強く、意義に於てより重要であり、地位に於てより高きものなることを思はざるを得ない。即ち意識の志向性に於ては主觀的なものが客觀的なものを超えて存することを知るのである。

かくいへばとて我々は勿論ノエシスがノエマを離れて *absonne* に存在し得ることを主張せんとするものではない。否むしろ、ノエシスの要素がノエマ的要素なくして存在し得ぬことは如何なる場合でも保證され得る本質法則 (*Weensgesetz*)⁽²⁹⁾ であることを知るが故に、却つてノエマがノエシスを成立せしめてゐるかにも考へ得られると

信ずるものである。けれどもそれにも拘はらずノエシスが主でノエマが従であるとせねばならぬことは、例へばフツセールがノエマ的要素に對して、それが特にノエシスの要素に附屬してゐる (*zugehörigen*)⁽³⁰⁾ といふ形容詞を附加して居ることによつても明かである。附屬してゐることは從屬してゐることである。即ちノエシスとノエマ

とは嚴密な意味では決して兩々相對峙して譲らない如き存在ではない。勿論兩者は根本的に區別はせねばならず、またその平行的相關關係も認めねばならぬが、併しその相關に於てノエマがノエシスに從屬してゐることを見逃し得ぬのである。即ちノエシスが先づ成層的に組成されてゐるが故に、それに應じてノエマ的相關者が基礎づけられるのである。⁽³¹⁾ 然りとするならばノエマはノエシスの中に構成的に包有されてゐるとはいへぬであらう

か。ノエシスがそれ自らに意識對象性の構成をなす機能を具備してゐるといへるも、實はかくの如き意味に於てどあつたのである。こゝに於て、フツセルが客觀よりも主觀を重しとすること、而もそれがカント的構成説の主觀主義的意味に於てではないことが明かであらう。

このことはまた現象學の領域が純粹自我にあり、この純粹自我の本質がノエマ的方面ではなくノエシス的方面に存することによつても明かである。ノエシスがかくその本質たり得るのは、志向性を含み、意味づけることによる對象構成の機能を有するからであり、ノエマがその本質たり得ぬのはこれを有たぬからである。ノエマも超越的對象Xを志向してゐると解されることがあるとしても、それは眞のノエゼ的作用を自ら有つのではなく、ノエシスのその轉移のみである。即ちノエマは獨立に志向性を有たぬ故に純粹自我の本質ではない。純粹自我即ち純粹意識の本質は、素材の意味化、實質の形式化、對象の作用化、客觀の主觀化をなすところにあるといへるであらう。こゝに於ては客觀は主觀の客觀であるが、主觀が客觀の主觀でもなく、主觀客觀平等の地位の保證でもない。ノエシスは勿論ノエマなくしては存し得ぬが、それにも増してノエマはノエシスなくして存在し得ぬのである。ノエマが眞の存在でなく、偽存在(Pseudoeexistenz)であるといはれるのもこれがためであらう。かくてノエマの存在様相がノエシスの信念様相に影響することはいふまでもないが、それにも増して後者の前者に働きかけることが大なのである。ノエシスによつて意味づけられることなしにはノエマは如何なる存在様相をも有つことが出来ぬ。併しそれが前述の如く構成説の意味での存在性附與でないことは、ノエシスの意附づけが指定作用

ではなくしてむしろ中和作用内のものであることによつても明かである。けれども勿論それはフツセールの主観主義的傾向を否定するものではない。

四

主観・客観の關係に對するかくの如きフツセールの態度は、彼の強調する反省作用を顧みることによつて一層明かとなる。反省が現象學的方法の中心概念であり、現象學の態度は反省に向つて行く態度を意味し、現象學的方法は全く反省作用に外ならぬことは彼の叙述に於て明かである。併し現象學的方法としての反省は勿論普通の反省の如く未反省の內面的 *essence* を客観の世界に投出してこれを對象化することではなく、それは純粹自我の內面的自覺であり、自己自らの具體化の方法であると解せられねばならぬ。併しながら、こゝに於ても反省するものはやはりノエシスであり、反省されるものはノエマであること、随つてそれは依然主客關係に於て存することに變りはない。けれどもこの場合のその關係は、單に相關的平行の關係といへるのみではいひ足らぬほどに緊密なる關係である。主客はこの場合眞に全く相即不離である。けれどもこの場合でも主観が主で客観が従であると考え得られることは、例へば反省的ノエシスが反省的ノエマを基礎づけてゐるといふ關係から明かにし得るであらう。然らばその基礎づけの關係とは如何なるものか。

基礎づけ (*Fundierung*) の意義及びそれが論理的基礎づけ (*Begründung*) と區別せられる所以の性質などに就い

ては、併し既に周知のこととしてその叙述を省いてもよいであらう。今は只必要な限りに於てその意義を概観し、その關係に於ては基礎づけるものと基礎づけられるものとがなければならず、さうして一方はノエシスの性格に當り他方はノエマの性格に當ることを指摘し、それがやがて主觀によつて客觀が土臺づけられる關係となることの所以の理を明かならしめることに叙述の範圍を限定して置かう。

基礎づけは一切の原領域としての純粹意識に於ける唯一の本質法則であるといはれるが、これを定義してフツセルは次の如くいふ、即ち「或る種の内容Aが他の種の内容Bに於て基礎づけられるといふことは、Aがその本質上（即ち法則的にその特殊なる固有の性質に基いて）Bが成立することなしにはそれが成立し得ないといふことである」⁽³⁴⁾と。これを他の言葉でいふならば、AがBによる基礎づけを必要とするといふのは常にAが本質

法則的にそれ自らとして只それとBとの結合たる包括的統一内に於てのみ存在が可能であるといふことであり、⁽³⁵⁾尙約言するならばAはこの場合Bなくして存在し得ぬといふ關係である。勿論この場合存在し得ぬといふことは時空因果の事實關係内に實在し得ぬといふ意味ではなく、純粹意識の本質上内在的にAはBなくして與へ得られぬといふことに外ならぬ。即ち意識の本質的領域に於て、高次の意識が常に必ず低次の意識を土臺としてそれによつて直接的對象關係を得ることが、基礎づけである。例へば意識作用がすべて表象作用に基礎づけられてゐる如きである。さうして反省の如き高等なる意識領域に於ては、反省するものが反省されるものを基礎づけると見ることができであらう。何故ならばフツセルが明言する如く、高等なる意識の領野に於ては、一の具體的體

驗統一内に於て多くのノエシスが相重り合つて組み立てられ、そしてそれに従つてノエマ的相關者が基礎づけられてゐるからである。⁽³⁶⁾即ちノエシスがノエマを基礎づけてゐると見られ、随つてノエシスなくしてノエマの存在し得ぬ理を、それ故にまた主観的なものなくして客観的なものゝ存し得ぬ理を了得し得るのである。尤もノエシスそれ自らの中に於ては或はノエゼがヒーレーに基礎づけられてゐるかも知れない。何故ならば下層的ヒーレーなくしては上層的モルペーが存在し得ぬからである。けれどもヒーレーは決してノエマではない。結局志向的體驗に於ては、最下層としてのヒーレーがモルペーとしてのノエゼを基礎づけ、このヒーレーとモルペーとの統一體なるノエシスが更にノエマを基礎づけ、ノエシスとノエマとの統一體なる純粹意識が他の一切の存在を基礎づけてゐると見ることが出来るであらう。かくて反省に於ては反省的ノエシスが反省的ノエマを基礎づけることゝなり、反省客観は反省主観によつて存在せしめられ、結局客観は主観化せられた客観となるのである。勿論「未反省の體驗が反省の中に移り變つてもその本質を失ふことがない」⁽³⁷⁾といふ前提を固持せんとするフツセールの立場では、客観の主観化は客観に如何なる變容をも本質的には與へないかも知れない。けれどもフツセールの意識の志向性を根柢とする現象學では、主観客観が平等に影響し合ふことの主張をなすのでもなく、客観化された主観を説くのもなくして、客観の主観化を重ずる主観主義的傾向が甚だ濃く色彩づけられてゐるといふ事實を否定することができない。

尙このことはノエシスの要素とノエマ的要素に與へられた存在様相 (Seinsweise) を見るによつて一層明か

にせられるであらう。フツセールに於てはノエシスとノエマとは決して同一の存在様相に於て存するものではなかつた。ノエシスは明かに意識を實質的に構成してゐるところの實存的 (real) な要素であるが、ノエマはかゝる存在様相のものではなく、只その志向的關係に立つ非實存的 (ideal) なる、謂はゞ觀念的 (ideell) なる要素であつた。⁽³⁸⁾ノエシスがレールである所以はそれが眞實に心的に存在するからであり、ノエマがイデールなる所以はそれがノエシスによつて思念されたものに過ぎぬからである。この兩者が前述の如く全く平行關係に於てあり、平等に取扱はれてゐるとせば、それらは同じ存在様相に於て同じ存在性の保證を受けて居るべき筈である。然るに一方レールであり他がイデールであるとされた所以は、フツセールがノエシスをより直接に具體的なものとし、ノエマをそれに比して少しく具體性に於て缺くところあることを認めた故に外ならぬ。彼はモルペーもヒーレーも共にレールと考へ、これらとイデールなるノエマとを意識構成の三要素となして居るが、そのノエシスの方面をより重く見てゐることは、彼が本來の意味で體驗を構成するものはレールなる要素であるとしてゐるのに徴しても明かであらう。さうしてレールなるものがイデールなるものに比してより多く直接的存在たることはいふまでもない。以上によつてフツセールに於てはノエシスをノエマより重く見ること、即ち主觀尊重の立場にあることが明かにされたことと思ふ。

併しながら以上のことは、それ故にフツセルに於ては主観的なもの即ちノエシスの側面の解明が他に優れて可能であつたことを意味するものでは決してない。むしろ反對にそれが餘りに主観に即する立場に存するが故に、その純粹記述は却つて客観的なもの即ちノエマ的側に向けられねばならなかつたことをすら意味してゐる。ノエシスを重んじ自らをそれに即せしめてゐるが故に却つてノエマの姿を明かに見つめ、その記述に多くを費さねばならなかつたといふこの論述は、一見逆義的に見えて而も決してさうでないことは、例へば人は自らの眼の所有者なるが故に直接にはその眼を見ることができず、却つて對象的なものへの關心を多くなさねばならぬことの理を思ふことによつても明かにし得るであらう。眼が眼自らを見得ざる如く、フツセルの主観的立場は却つて主観そのもの、存在についての反省を怠らしめたかに思はれる。即ちフツセルの現象學は餘りに即主観的立場に於て存するが故に却つて主観化された客観、ノエシス化せられたノエマ面のみを明かに觀得することとなり、遂にその側の分析記述にそれ自らの主なる仕事を見出すに至つたのではないかと思はれる。常に自己に止るものは自己の存在を忘れ、絶えて他人を見ることがなきものは自己への深き理解を缺く。フツセルの純粹現象學が、所謂作用形相學（*Typ-Eidetik*）として自ら主観的なもの、作用的なるもの、⁽⁴⁰⁾解明を重んじ、ノエシス的なものへの現象學的觀察及び分析を何よりも貴しとせるにも拘はらず、事實に於てその成果が常にノエマ的側面に通ずる迂路に於てのみ得られることとなり、⁽⁴¹⁾そのため却つて餘りにも本體論的であり、本體化的形相學（*Ontologisierende Eidetik*）と呼ばれるに至つたのは、固より對象的側面に超越的存在を定立したからであらう⁽⁴²⁾

意識の志向性より存在の矛盾性へ

が、而もその根柢にはそれ自身餘りにもよくノエマ的なものを見得る立場、即ちノエシスの主觀主義的立場に立つてゐるからであると解し得られるのである。かゝることより、かく先づ客觀的側面に超越的な或ものを定立するに至つた本體論的傾向が、やがてはまた逆に主觀的側面にも或もの一般として超越的なXを考へることゝなり、遂にはそれをば不可疑的に確實にして絶對的に與へられたもの、また絶對的に存在するものと解することゝなり、即ちエールリツヒもいへる如く本體化的理念化が對象方面のみでなく作用方面にも厄したと見られるやうにさへなつたのである。フツセールに於て純粹自我の存在そのものが全く無批判的に許容せられ、それについて存在自身が問題になり得なかつた理由もこゝに存すると見られるのである。併しながら眞に主觀的なもの、作用的なるもの、ノエシ的なものは果してそれ自身存在するものとして與へ得られるであらうか。即ち存在といふ規定を無批判的に受け得らるべき性質のものであらうか。存在といふ規定をさへ受け得たものは既に規定せられたものであり、随つてノエマ的なものであつてノエシ的な性質のものではなくなりはせぬであらうか。ノエシスとしての作用そのもの、純粹自我そのものはどこまでも非規定者として、随つて存在するともいひ得ぬものとして、即ちそれは全有であつて而も皆無なるものとして、單に思惟し得られるが如きもの、否思惟もし得られざる無規定者ではなからうか。然りとするならば當然純粹自我の存在そのもの、純粹意識の存在それ自身を先づ問題とするが如き學が、フツセールの現象學にとつて代はらねばならぬではなからうか。こゝにフツセールの所謂構成的現象學が、今少し具體的生命的なハイデッガーの解釋的現象學によつて代置されねばならぬ所以

の理由があつたのではなからうか。これがもし眞理とするならば今日遭遇せる構成的現象學の痛ましき悲運は、餘りにも主觀に踰越せるが故に却つて主觀の存在そのものへの反省をなすに由なく、對象的な方面へと同じく主觀の方面へも或る超越的な存在者を獨斷的に措定することゝはなつた彼自らの性格に根ざすものといはなければならぬ。哲學的なものに於てもその運命はまさしくその性格に根ざすものであつた。

フツセールの構成的現象學がかく主觀尊重の立場に立ち、ノエシスの作用を自らの即自的立場とするが故に、當然にも主觀によつて眺められた客觀、ノエシスによつて志向せられたノエマをのみその研究の對象領域とせねばならず、それが遂には逆に厄して主觀的なものゝ側にも本體的超越的存在を定立するに至つたゝめに、却つて生命から離れ、具體性から遠ざかつたといふ非難がなされるに至つたとするならば、その缺陷を補つて後に來るものは、當然客觀的立場に自己を置き、以つて主觀的なものを客觀に關係づけてこれを解釋し、客觀からの主觀への作用そのものに多く心を用ひる如き學說でなければならぬ。客觀からの影響によつて脅かされた主觀、客觀の力に堪えなくされてゐる主觀、これをその學說の基礎的なものとする學が、ハイデッガーの解釋的現象學であるとは解し得られぬであらうか。人はそこに於ては意識の志向性の代りに人間の關心性がその基礎をなしてゐることを見るであらう。その人間の關心性とは何であらうか。それこそ客觀に脅かされた主觀の姿、世界の影響によつて落ち付きなくされてゐる人間の姿ではなからうか。——意識の志向性から發出し來つた我々の歩みはかくて當然にも人間の關心性へと進まねばならぬのである。

意識の志向性より存在の矛盾性へ

- 〔註〕 (1) Brentano : *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Bd. 1, s. 124—125.——(2) Husserl: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, s. 64f, s. 168, s. 268, etc.——(3) *ibid.* s. 65.——(4) *ibid.* s. 161.——(5) *ibid.* 65—67.——(6) *ibid.* §. 41.——(7) *ibid.* §. 56.——(8) z.B. Rickert: *Gegenstand der Erkenntnis*, 4u. 5 aufl. s. 57.——(9) z. B. *ibid.* s. 31.——(10) *ibid.* s. 46.——(11) Husserl: *Ideen usw.*, § 58f.——(12) *ibid.* s. 133.——(13) *ibid.* § 93.——(14) Brentano : *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Bd. 1, s. 124.——(15) *ibid.* s. 137.——(16) Husserl: *Ideen usw.* s. 63.——(17) *ibid.* s. 169.——(18) *ibid.* s. 194.——(19) *ibid.* s. 61—63, s. 159f, etc.——(20) *ibid.* s. 66.——(21) *ibid.* s. 271.——(22) *ibid.* s. 267.——(23) *ibid.* s. 272.——(24) *ibid.* s. 265.——(25) *ibid.* s. 176.——(26) *ibid.* s. 176.——(27) *ibid.* s. 172.——(28) *ibid.* s. 172.——(29) *ibid.* s. 193.——(30) *ibid.* s. 193f.——(31) *ibid.* s. 193.——(32) *ibid.* s. 104.——(33) *ibid.* s. 144.——(34) Husserl: *Logische Untersuchungen*, II Bd. 1, s. 275.——(35) *ibid.* s. 261.——(36) Husserl: *Ideen usw.*, s. 193.——(37) *ibid.* s. 155.——(38) *ibid.* § 97f.——(39) *ibid.* s. 181. *noesis* & *eigentliche Komponente* と呼んでゐる。——(40) *ibid.* s. 175.——(41) Ehrlich: *Kant und Husserl*, s. 153.——(42) *ibid.* s. 151.——(43) Husserl: *Ideen usw.*, s. 81, 85—87.——(44) *ibid.* s. 104.——(45) Ehrlich: *Kant und Husserl*, s. 152.